



御前崎



御前崎

御前崎市比木に地域貢献のために日々情熱を注いでいる方がいるということで取材しました。その人の名は宮本勝海さんです。宮本さんは昭和31年(1956年)～平成7年(1995年)まで小学校教員として御前崎市、牧之原市、掛川市に勤務されていました。この5月の誕生日を迎え84歳になります。

子どもの頃は腺病質といわれ虚弱な体でした。当時は戦時中でもあり医療環境も悪く栄養も思うようにとれませんでした。教員になってからも精神的にかなりきつく、一日中立ってする仕事でもあり、さらに宿直もあり同僚にも気を遣い、常に風邪や腹痛、下痢などに悩まされていました。体重も52キロ(現在は62キロ)とかなり痩せていました。

定年退職後は、教員という仕事から解放され自分の好きなことをやれるようになり、体重も62キロと10キロも太りました。ふと振り返れば教員生活が長かったため自分の住んでいる地域のことは全く知らない状況でした。そこで宮本さんは地域の活動に積極的に取り組むようになりやっと仲間になれました。現在も毎朝高松神社まで行き200段ほどある階段を5往復し健康管理をしているそうです。

今回の取材にあたり宮本さんご自身が原稿を書いて下さったので写真を交えて掲載させて頂きました。



御前崎

私が地域の生物に関心をもった経過



御前崎

御前崎市比木 宮本勝海

現在、私は日本自然保護協会自然観察指導員及び静岡県環境学習指導員として、地域の保育園・幼稚園・小学校・中学校(以前は高校も)・自然観察サークル・各種団体等の依頼を受けて、動植物についてインストラクションをしている。しかし、私は元小学校の教師で、特別に自然環境とか生物について専門的な学習や研究は殆どしてこなかったもので、指導というよりは「自然に興味・関心のある人達と共に楽しんでいる」と言った方が正しいと思っている。ただ、長年地域の自然を観察してきたので、少しは自然についての知識や自然を観る楽しさは身につけているように思う。

1. 日常的に地域の自然に触れた幼少の頃

私は1935年(昭和10年)に現在も生活している御前崎市比木(元 小笠郡比村)に生まれた。当時比木の人々は殆ど農家だったが、父は役場職員、母は小学校教員で、親たちは私をも公務員にしたかったようである。

私の小学校の頃、学校から帰っての暮らしは近所の子ども(年上や年下)と森林や川、神社の森、田んぼやどんぶち(水田の一面に作ってある溜まり)で遊ぶ事が多かった。記憶している遊び方の一部を上げてみる。

- (1) 兵隊ごっこ・・・第2次大戦中で将来男性は軍人になるように教育された
- (2) かくれんぼ

- (3) めんこ(「ペタンごっこ」と称していた)
- (4) 陣取り(地面へ大きなクギを刺して遊ぶ)
- (5) 凧揚げ
- (6) メジロ捕り(子どもだけでなく、大人もメジロを飼育していた)
- (7) クビッコ(森林の中に罠を仕掛けて野生鳥類を捕る)⇒焼き鳥
- (8) オンジョ(ギンヤンマ)捕り
- (9) かえんどり・・・どんぶちの水を汲みだし、魚類を捕獲 ⇒焼き魚
- (10) 森へ入って木登り

遊ぶ場所は現在の子どもと違って屋外、特に森や神社の境内や池や川だった。冬季の気温は可成り低く、ため池に張った氷は10cm以上で、氷の上で滑って遊んだりして火を焚いて温まった記憶がある。

下校後とか日曜・休日は家の手伝いもした。食糧難のため、我が家は農家ではないが畑に麦・さつまいも・蕎麦・野菜などを作っていた。その手伝いで畑を耕したり堆肥を作って畑に施したり収穫をした。戦後、母は教員では食べていけないという事で退職し、近所の農家に貸してあった田んぼを返してもらって稲作もした。当時の農作業は全て手作業で、能率は上がらず収穫も十分ではなかった。作物には様々な昆虫が付き、鳥類(カラス類やヒヨドリ)やノウサギの害も少なくなかった。稲を食害するイナゴ(コバネイナゴ・ハネナガイナゴ)の生息量はすさまじく、畦を歩いただけで体中にパタパタとイナゴが当たった。イナゴも捕まえて焼いて食べた。

家の手伝いには燃料集めもあった。現在のように化石燃料や電熱器は無く、全て森林から得る薪・落ち葉・枯れ枝を燃料として使った。親と共に森林に入り、ごかき(マツの落ち葉をかき集める)や焚き木拾いをした。林床には多くの森林性の植物(シュンラン・ナギラン・コクラン・シダ類等)が生育していた。また、樹木を伐採して薪を作った。シイやカシ類で薪を作る時、割ると中に潜んでいた木虫(シロスジカミキリの幼虫)が出て来るので、これを籠や火鉢の火で焼いて食べた。香ばしくて美味しかった。

こうした暮らしの中で、私は地域の自然と日常的に触れ合い、好奇心や興味を当たり前のように持った。勿論私だけでなく子どもたちは自然について様々な関心や知識を持っていた。昨年、子どもの頃に大人の人や友人から教わった動植物の名前をまとめてみた。動植物の名前は殆どが俗称で(方言のようなもの)と総称(同じ仲間をまとめて呼ぶ)で、現在使われている和名(正式な名称)も使われていた。70数年前の事で記憶は確かではないが、子どもの頃ほぼ下記のように使われていたように思う。

- 草本 類 たんぽこ・ぎすぐさ・はぐさ等約20種
- 木本類 いまめ・かし・いぬもち等約20種
- 昆虫 くまんばち・ちーちー・おんじょ等約30種
- 野生鳥類 めんじい・やまばと・かっか等約18種
- その他の生物 ふくがえる・しろごろし・どんきゅう・むじな等約15種

こうしてまとめてみると、私の幼少の頃は地域の大人も子どもも身近な生物について100種類以上の生態や名称等を知っていた事が分かった。これらは住民が特別に調査や資料で調べたのではなく、遊びや作業の中で自然に覚えたもので、知らないと恥ずかしいくらいだった。

私は森林の中に先輩から教わってクビッコという鳥を捕る罠を沢山仕掛け、毎日数羽の鳥を捕った。現在は法律(鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律)で無許可での鳥獣の捕獲や飼育は禁止されているが、当時は何の規制も無かった。クビッコで鳥を捕る目的は焼き鳥にして食べる事だったが、罠にかかっても生きていた鳥は食わずに飼育した。アオジ・クロジ・シロハラ・ツグミ・トラツグミ・カケス・キジバトなどを手作りの飼育箱で飼った。クビッコで捕らえた以外の鳥(フクロウ・オオコノハズク・ホオジロ等)も手に入ると飼育した。飼育してみると野生鳥類の細かな形状や色彩、動作や鳴き声(地鳴きと囀り)も良く分かるようになった。しかし、当時は生物についての参考資料は殆ど無く、自分で観察して覚えるしか無かった。

野生鳥類の他にトンボ類に興味を持った。遊びの一つにオンジョしめ(ギンヤンマ捕り)があり、当時多数生息していたギンヤンマを女性の長い髪の毛とツルウメモドキの実を使って捕まえるのがとても楽しかった。地域には多種類のトンボが多数生息していて、これを捕まえて虫かごに入れて観察した。標本づくりというものは知らなかったし参考資料も出回っていなかったのも、ただ数日籠に入れておき、死ぬと捨てた。現在はトンボ類の種数も生息数もひどく減少し、見られなくなった種も少なくない。多分、幼虫の生息する水辺(水田・池・川等)の環境が人工的に大きく変えられた事が原因の一つではないか。



御前崎



御前崎

2. 野生鳥類について興味・関心を深める

小学校4年の夏、終戦を迎えた。書店に少しずつ生物関係の書物が入ってきた。1950年頃だったと記憶しているが、動物学図鑑鳥類編という本を生まれて初めて買った。野生鳥類だけでなく鳥類一般の説明が書かれ、分類も現在とは可成り異なっていたが、俗名しか知らなかった私は初めて和名や生

態について知った貴重な資料だった。この図鑑は紙質が粗悪で今見ると茶色になって所々破れているが現在も大切に本棚に収めてある。

中学生になって、飼育していたアオジの羽色が変化してきたので不思議に思い、野鳥研究者として知られていた内田清之介博士に手紙を出した。博士からの返事で鳥類は成長過程で羽毛が生え変わり、アオジの場合も幼鳥から成鳥になったためだろうとご指導を受けた。

私が卒業した小学校の校長から地区内に生息する野生鳥類の資料を作って欲しいと頼まれた。私の知らない間に「宮本は鳥バカ」という噂がされるようになり、校長もそれを知って教材づくりを頼みに来たらしい。早速地区内で観察した鳥類の一覧と説明、模造紙にイラストと和名を時間かけて描いて持って行った。校長はとても喜んで長い間廊下の壁面に展示してくれた。

中学3年生の時、国語の授業で自由作文を書くように言われ、自然についての体験や自然の素晴らしさを書いた。国語の先生は文学、特に和歌を作ることで知られた方で、私の拙い作文を大変褒めてくださった。作文力は無く表現は不十分だったと思うが、自分の体験から得た感情や考えを正直に書いた事が評価されただけだった。

こうして、僅かではあるが野生生物に興味を持ち、多少の知識を持つようになったのは、資料が手に入った事や周りの人達から認められて更に努力の必要性を感じたからではないかと考える。

3. 生物学への興味

高校の理科で生物を選択した。生物の先生は東大農学部で生物を学んだ篠田先生で、とても分かり易く、楽しい授業をしてくださった。先生のお父上は朝鮮の大学学長で、終戦間際に先生だけ引き上げて来られ、その時の話など生物とは関係の無い話などして生徒を楽しませてくださった。生物の授業を通して生物の生き方や進化、生物同士の関係などを学んだ。野生鳥類の観察は趣味の段階から僅かながら生物学の初歩的なものに進んだような気がする。

大学で生物を学びたいので農学部へ行きたいという願いがあったが、父親からそんな事を身に付けてもこの辺りには勤め口がないから教員になるために教育学部へ行くように強く言われた。仕方なく静岡大学教育学部へ入学した。後で知った事だが、他の学部でも教職課程を取れば教員になれたので、そうすればよかったとやや後悔した。

大学での一般教養の生物で志村先生(シダ類研究者)の講義を受けた。研究者として高度の研究をされておられ、興味を更に深めた。試験の問題は「紅葉の仕組みについて説明せよ」だったと記憶している。講義が面白く関心を持って臨んでいたため、試験の答案もすらすら書いて、成績は「優」だった。(高校で学ばなかった化学・物理の成績は可)



御前崎



御前崎

4. 趣味を生かして

大学を出て最初に就職した学校は町内の小学校だった。裏山は砂丘で松林(現在は大規模なゴルフ場と高級ホテル)、南へ30分歩くと遠州灘という豊かな自然に恵まれていた。当時の学校教育はあまり管理的ではなく、授業も教室だけでなく裏山で理科や音楽の授業として楽しみ、時には半日海岸へ行って理科・社会の勉強と称して遊んだ。自然の中での授業は児童も喜び、観察したり体験したり植物や昆虫・鳥類等についても児童と共に楽しんだ。退職後、成人となった人達から同級会に何度も招待されるが、思い出話は教室で行った授業の事では無く、裏山や海岸や川で行った多様な内容の勉強が楽しかったとか役立ったという話が多い。

20歳の中頃、勧められて日本野鳥の会に入会した。会誌が毎月届けられ、野生鳥類についての様々な情報を得ることができた。また、日本野鳥の会には各地に支部があって、支部毎に観察会や研究会を行っている事を知った。しかし私の住んでいる静岡県西部には支部が無いので、数人の野鳥の会会員と協議してやっと遠江支部を作った。支部会員も次第に増加し、活動として観察会や支部報の発行も行うようになった。

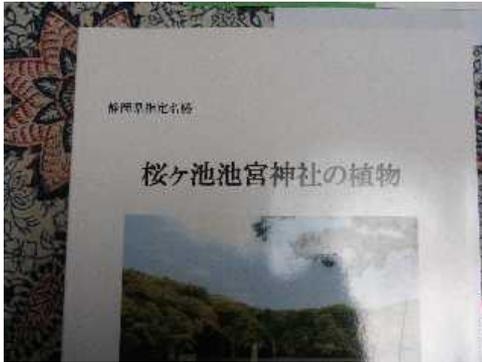
5. 指導員・調査員として

30代になって日本自然保護協会に入会し、3泊4日程の講習を受けて自然観察指導員となった。講習の講師は日本で名の通った動植物の研究者で、かなり専門的な講義だったように記憶している。生物についての知識だけでなく、自然観察指導の在り方も学んだ。講習を終わってからテストがあった。屋外へ出て、動植物何でもよいからそれについて興味深く説明せよという事だった。私は道端に生えていたフキについて10分余り話した記憶がある。

どうい関係か未だははっきりしないが、日本自然保護協会自然観察指導員になると県の自然観察指導員(現在は自然環境学習指導員)として県内の自然関係インストラクターをする事になった。県の自然保護課での仕事(観察会・観察ガイドブック作成・生物調査等)や農林水産省関係の会合へ参加

或いは町づくりの会へも助言者として出席を依頼された。一時県内の大学の客員講師として野生鳥類の生息分布を調査した。また、大規模な開発に伴う環境影響アセスメントの一環として野生鳥類、特に猛禽類について県内の野鳥の会会員と共に何年も調査員として各所の調査をした。この時、調査員同士が連絡し合うためにアマチュア無線の資格を取った。(携帯電話は無かったので)

学校へ勤務しながらこのような仕事を受けて何とか進めていたが、日曜・休日を使っての仕事で、思うようにできなかった。しかし、指導・調査に必要な知識技術はある程度なくてはならないので、事前に色々な資料を調べ、研究者に教わって少しずつ身に付けてきた。また、こうした仕事は野生鳥類に関係した物だけでなく、植物や昆虫についてもある程度知識が必要とされた。鳥類は生きるために昆虫や植物を餌にしているし、繁殖環境も植物と深い関係がある。専門的な高度な研究ではなくてもいいので、できるだけ広く生物関係について学ぼうとして植物や昆虫関係の資料も手に入れ、またそれぞれの生物研究者に指導を受けるように努めた。



御前崎



御前崎

6. 鳥獣保護員として

教員を退職してから各種の地域役員に任命された。県知事が任命する鳥獣保護員も依頼された。仕事の内容は役職名の通り鳥獣を保護するものであるが、そのためには鳥獣についての知識が必要である。例えば、狩猟者が狩猟を禁止されている鳥獣を捕獲していないか確認したり、飼育が許可されている鳥類以外の物を捕獲・飼育したりしていないか調べる。ところが、こうした活動は狩猟者や野鳥愛好家(?)から嫌われ、怨まれた。違反者に禁止事項を説明すると、その場で猛烈に文句を言ったり、「あいつの家に夜中にいたずら電話でもかけてやれ」という噂がハンター仲間でも広がったりしたという事を聞いた。また、県の主催する鳥獣保護員の会合では自分はどんな鳥獣をどれだけ捕ったか自慢話をし、違法な鳥類を捕る事など注意する必要はない等という意見が堂々となされた。それは其の筈、鳥獣保護員の殆どが狩猟者だからである。つまり、各市町では鳥や獣についての知識のある人はハンターだけで、そのような人に依頼していると。私は真面目にやると怨まれる鳥獣保護員を8年続けたが、何の役にも立っていないように思い退職した。ちなみに、鳥獣保護員を10年以上勤めると表彰される事も知っていたが、私はそのような表彰は望む事は全く無かった。

7. 自然観察サークルを作る

地域で自然に関心を持っている人から「自然観察サークルを作りませんか」と話しかけられ、浜岡自然愛好会を作った。町内・町外から多数の入会者があり、100名程になった。地域の自然(動植物・地学地形・天体等)に詳しい人も会員の中にいて、こうした人達に指導を受けて生物以外の地質・地学・天体の観察をしたり、ネーチャーゲームで楽しんだりした。このように多様な物を対象に観察会をするサークルは他には無かったようだ。時には県外の湿原や高地に行き、自分の地域と異なる自然を観察したりした。この会は20年ほど続いたが、会員や講師の高齢化や役員になる人がいなくなり、解散した。

ところが、やはり地域の自然について楽しみたい・学びたいという声があり、再び自然観察会「ほおじろの会」ができた。観察の対象は生物で、私が主に講師を依頼されたが、会員の中にも植物に詳しい方もいるので、みんなで楽しみ、勉強して自然に対する意識を高めようとしている。会員の中からも余り専門的な活動を進めるといけないという意見もあり、楽しみながら多くの人に自然環境について意識するように進め方を考えている。

植物の勉強をもう少ししたいと思い、SBS学園に入級を申し込んだら、どういふ訳か生徒では無く講師になって欲しいと頼まれ、10数年植物学者の方と野生鳥類の案内役をした。私は講師という程の資格も実力も無いが、植物の講師の先生から多くの植物についての知識を得る事ができた。

私の家の裏に賀茂神社があり、広い森林がある。この森林は県下にも少ない極相林(植物の種の変化が止まり、一定の樹木や草本が生育する森林)として、静岡県指定の天然記念物になっている。以前から動植物の研究者が調査に訪れ、専門書に調査結果が掲載され、国立博物館や浜松動物園に標本が保管されている。私は天然記念物指定に際して教育委員会の依頼で植物学者の杉野先生と環境調査会社社長の太田さんと共に社叢の動植物を調査し、教育委員会発行の冊子にまとめてある。



御前崎



御前崎

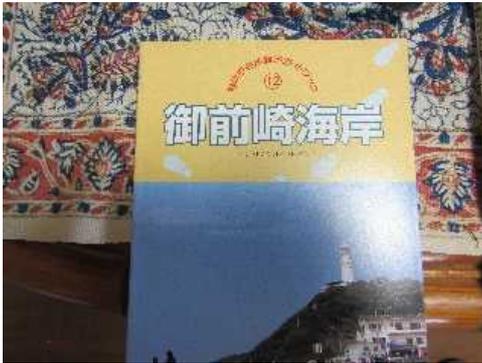
8. 環境教育の指導者として

市内の成人団体や毎年御前崎市内の保育園児・幼稚園児・小学生がこの森に来て観察したり遊んだりし、私は年齢に応じて社叢の話をしている。

掛川市の小学校・御前崎市の小学校・牧之原市の小学校からも毎年依頼を受け、出かけて行って地域の自然環境学習の指導をしている。

園児や児童に学習として自然観察をする場合は、前もって担任に指導目標や指導構想を伺い、観察場所と一緒に下見(安全性・観察対象・その他)をしている。残念な事は小学校でこのような学習(特別活動・総合的な学習)の時間が減らされている事である。多くの子ども(特に低学年)は自然に様々な好奇心を持っていて、自然環境への興味・関心の基盤はあるのに、これを発展させる学習(クラブ活動・総合的な学習・生活科)の時間数が以前より減少しているように感じる。また、校外で何らかの事故があっては困るという心配が先行し、観察対象の多い校外への引率を止める学校もある。

時々市内や市外の方から動植物についての質問が寄せられる。分かる事はお答えするが、分からない時は研究者に教えて頂く。その際は私が現物を観て特徴を把握し、写真を撮って研究者にメールで送る。研究者によっては標本が無いと同定できないと言われるので、標本を作って送る場合もある。私にとって自然について学ぶ事はまだまだ限りなくある。



御前崎



御前崎

9. 体験した事を残す

私は後期高齢者で、いつこの世を去るか分からない。今までの生き方を振り返って、あれもやりたかった、こうすればよかったと後悔することが多い。優れた人生を送った人から見ると、お前はお粗末な人間だったと思うだろう。しかし、私なりに少しは努力し、人のためになったのかもしれないと思う。お粗末なりに生きてきた事をまとめるために本も作った。「小笠山・掛川・御前崎周辺の植物・昆虫・野鳥」と「身近な生き物が面白い」の2冊である。どちらも自分の記録や写真・イラストを使い、文章もパソコンで全部打ち、製本だけ業者に頼んだ。この本は国立国会図書館で所蔵されていると、かつて担任した信州大学名誉教授(現在は長野県立工科短期大学校長)の大石君から連絡を受けた。

今のところ私は自然の中を動き回れる事ができるので、できるだけ依頼された自然関係の活動をしたと考えている。その際に資料や観察会のまとめも作って保存したいと思っている。ただ、私の他に地域の自然について住民の意識を高めたり、自然関係の相談に乗ったりする人が見当たらない。(私が知らないのかもしれない)園や学校で指導する人も今のところ居ないらしい。高度の知識や技術は無いよりある方が良いが、専門的な知識技術は無くても自然環境に関心を持ったり、疑問を解決したい人の相談に乗ったりするような人も欲しいと思う。

国を始め各県や市町村の政策や市民憲章に自然の大切さや自然保護をうたった項目がある。しかし、これを実現するための計画や政策などを進めている所は少ない。逆に開発と称して自然破壊を進めている事業が問題になっている。



御前崎



10. 自然との関わりで人としての生き方を考える

人類も生物の一種である。あらゆる生物が何十万年～何千万年というとても長い歴史の中で、地球上で生きるための条件に対応し、生態や生息方法等を変えたい。人類も様々な変化をしたが、特に脳が発達して生活に必要な条件を生かし作り出す能力を持った。しかし、一方退化消失した能力もある。

一例として他の動物の多くが持っている第六感（直感）は人類には殆ど無くなった。「勘・直感・虫の知らせ等」と言われる能力である。

「人間は万物の霊長」と言われる。即ち人間は全ての物の中で最も優れているという意味である。何をもって優れているのか十分に理解できない。私は生物として繁栄・存続に役立つ事が基本的な生き方ではないかと考える。そのために家族や自治体・国を構成し、約束（法律・条例）を作って守り、便利な生活のための生産活動を進めている。また、文化は無論の事、教育も他の動物に比して高度に発達している。こうした事は全ての人間が幸せに暮らせるためのものであろう。こうした生き方を実現させた状態が「万物の霊長」たる人間であろう。

しかし、現実はどうか。個人や地域・国が経済・土地・物等をできるだけ大量に獲得するため、或いは宗教や人種差別を進めるために戦争（殺し合い）という争いが絶えない。自己の欲望を満たすためにはあらゆる犠牲をもたせらわれない。また、健全な社会を構築するための法や条例や倫理に反した言動が蔓延している。残念ながら一部の政治家や色々な責任者までが約束事を犯している。私は野生生物も争いをしている場面を観察している。その理由は「生き残るため」「種の存続のため」だけで、人間のような理由で争う事は全く見られない。

哲学者のパスカルの言葉に「人間は考える葦である」がある。脳の発達により、葦より思考力はあるが、問題は「何をどう考えているか」である。生物の一種である人類が、発達した脳を際限なく使って生物としての生き方から離れていく事は、果たして人類の幸せか、今後子々孫々まで人間としての生き方を存続していく可能性があるか考える必要はないだろうか。

「自然など何の金にもならない。財政や資産を増やすためには開発が必要」と本気で考えている人達がまだ少なくない。森林・河川・海や海岸等はできるだけ人間の利便性や利潤を優先して工事をしたり、産業も自然保護より機能的な方法や技術を開発したりしている。そのために多くの生物が絶滅したり希少化したり、生態系が崩壊している。人間の健康で安全な暮らしが自然と深く関わっている事を多くの人が感じたり学んだりして、自然との共生を探求していく必要を感じている。



御前崎



御前崎

音楽の先生？——とんでもない

「宮本さんは音楽の先生ですか？」と良く聞かれる。2つのコーラスの講師をやり、色々な施設・地域の団体からの依頼で、下手なピアノやアコーディオンで伴奏をしていると、いかにも音楽の教師だと思われたい。全くの誤解である。

私は音楽（も）好きで、若い頃（60年程前）は浜岡合唱団のメンバーとして各地のコーラスグループと交流したり、有名な合唱団やオーケストラの演奏を聴きに度々行った。素晴らしい歌声や美しい楽器の音色で様々な表現をしている演奏を聴くと心の中まで爽やかになった。

優れた演奏を聴いていると、自分も何らかの音楽的な表現をしてみたいなと、至極単純な好奇心的欲求を持つようになった。私の大学生の頃や新任教師の頃は歌声運動が全国的に盛んだった。高校生

までは音楽に特別な興味を持たなかったが、大学で先輩たちから青年歌集という歌集を使って新しい歌を毎日教わった。日本の民謡・平和への希望・外国の歌等、それまで歌ったり聴いたりしたことのない素晴らしい歌が詰まっていた。就職した頃も歌声運動が盛んで、音楽専門の松下己作先生がリーダーで合唱団が地域に作られた。歌う事に自信は無かった私だったが勧められてこの合唱団に入った。

合唱の練習は町内の学校の音楽室で行い、松下先生がピアノで伴奏をした。しかし合唱団の交換会はピアノの無い大きな会場で行うので、伴奏はアコーディオンを使った。私はアコーディオンの得意な人に弾き方を教わって、何とか弾けるようになっていたので合唱の伴奏をした。今考えるとよくもあんな伴奏で皆さんが歌ってくれたものだ、冷や汗が出る。

私の教師の免許は小学校と中学の国語で、音楽は全く勉強をしなかった。ただ音楽が好きで、何となく歌ったり演奏をしていただけだった。それに、音楽関係の人(音楽教師や声楽家など)と知り合いになり、少しずつ音楽についての解釈や演奏の仕方を身に付ける必要を感じるようになった。学校での音楽の授業は新任の2~3年間は女性教師(当時、音楽は女教師が指導する事になっていた)にお願いしていたが、自分でもやってみたいと思うようになり、恥ずかしい授業をやるようになった。音楽の授業を続けているうちに慣れてきて、卒業式の式歌の伴奏迄頼まれるようになった。

教員を退職してから、どこでどう聞いたか分からないが、地域の人達からコーラスの指導を頼まれた。勿論断って、他の音楽専門の人を紹介した。地域づくりをしている知人から各地域の高齢者に歌ってもらうためにアコーディオン伴奏をして欲しいと頼まれた。これもお断りしたがどうしてもやって欲しいと言われ、仕方なく2年程下手な伴奏を続けた。

今から10数年前に私の地域の人(高齢者)から、「この地域でも歌う事が好きな人がいるので、歌の会を作りたい。ついては宮本さんにアコーディオン伴奏をお願いしたい」と頼まれた。高齢者歌う事はとてもよい活動だと思っていたので、今度はすぐに引き受けた。歌の会を「ささゆりの会」と名付け、大勢の高齢者が公民館へ集まって童謡・唱歌・懐メロ等を歌って楽しんでいる。この事を元同僚の藤原雪江さん(御前崎市合戸)が聞きつけて、私らの地域でも歌のサークルを作りたいので、指導してくださいと頼まれた。合戸は私の新任校のあった地域で、知り合いもあるので、引き受ける事にした。合戸でもサークル名を「ひばり会」と名付けた。



御前崎



御前崎

先日「ささゆりの会」の開催日にお伺いしてみました。会員の皆さんと宮本さんが弾くピアノの伴奏で明るく元気に楽しそうに歌っていました。

好奇心が旺盛な宮本さんは皆さんがやっているのを見ると自分もやってみたいと思う性分で趣味も多岐に亘っています。日々の動植物の観察活動の他に地域での歌の会や地域のボランティア活動などに情熱を注いでいます。ピアノもアコーディオンも独学で弾けるようになったようです。

「自分の好きなことを楽しんでいるだけです。それが地域貢献になっていればそれでいいんです」まさに人生100年時代を楽しんでいます。何事にも好奇心を持つことの大切さを学ばせて頂きました。

(お問合せ先 宮本勝海さん TEL0537-86-2719)

小笠・榛南地区 生きがい特派員 高井 豊